梅堂國政画
水錦隅田曙第三編
前嶋和橋補綴
伊東專三編輯
金松堂梓
下
中
上

伊東尊三編輯
金松堂梓
上

A468
7

水錦隅田曙伊東唐之著

千里必竟

此篇は巻中人物のとりを説く

横山町 世一圓屋 梓

三益社の紙面に掲げて。三九二十七章に物せし水錦隅田曙を今度一帙三冊の合巻に綴りなして。三編と以て大尾とする。離とねと三る三弦の。線の調べに内ゑり。藝妓にならぬ小子はまだ半玉の赤襟作者。獨立線香一本立る。及ばぬ事と知りながら。其処が所謂李の藝妓亞へ。今板いと初編の弘め。外題のお座附。口画の三下り。次い本文の騒き唄も画工の姉さんと便りよしてやうく勤めさ一袋いまづい処がお気に入りしろ。其跡口も跡口もと。着更の筆を置間もなくて。実に御見顔負のお蔭にて。如様に嬉しい合巻の。句と結びて笑覧あと。先づ御祝義の序文と記して。看客有難宜敷と云尓

干時明治十二年五月第二日曜日新橋金春の猫新道紫陽花畔楼に昼寐の暇

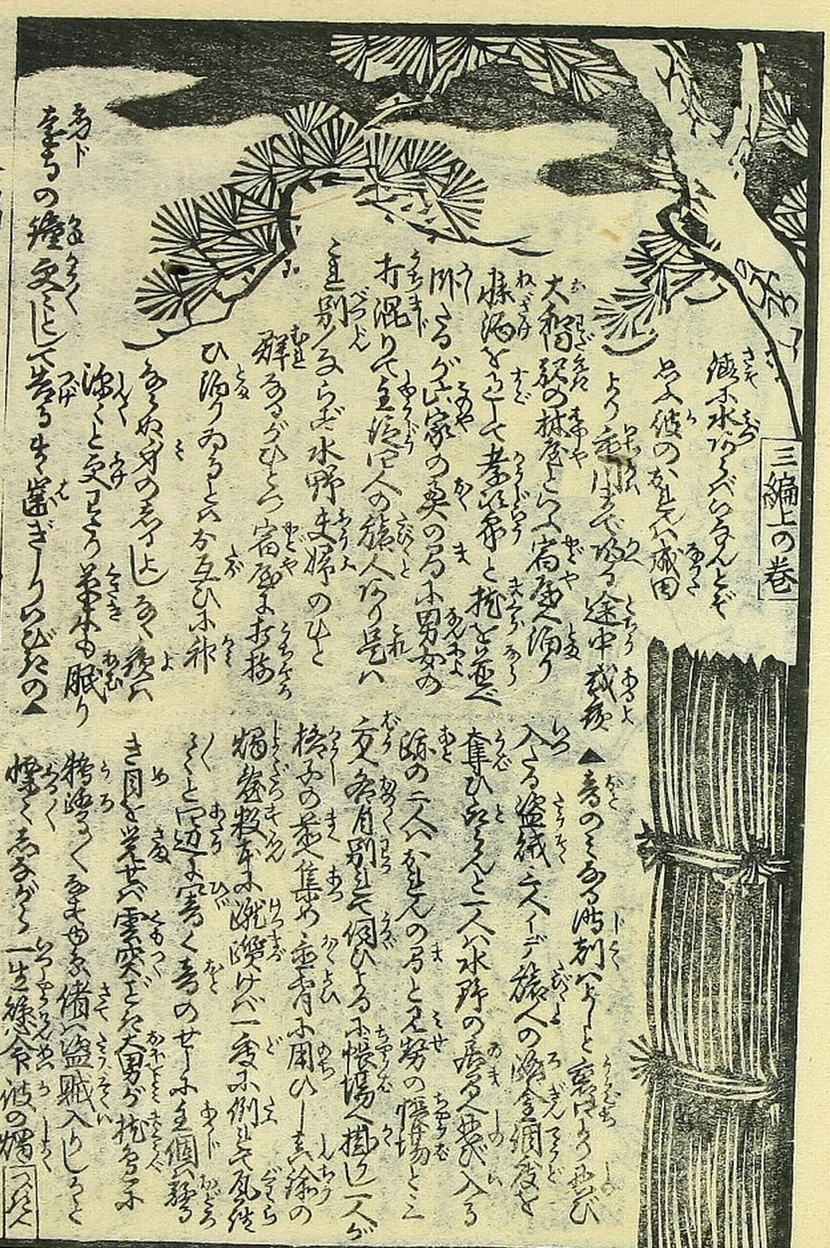
有喜世戯意者　伊東橋塘述

48-8157

酒田富次郎
女房おくま

荒磯徳蔵
蓮月尼

三編上の巻



つぎの夜となり
外面へ出でお丸の
姿の処へ
と近て行
そも〻家の
裏へ彼
小金ぶ尓ふ
と伺へば
花〻しる曉不と
須へ系月の中江出
草へ丈ゝ高く生え
蔦紅葉ゆゝ別
と云ると霧月
秋ふも迷ひ

と考るお丸を
近寄し治平ハ
障子ゆゝ附
怪しの声と
振返れ物の
お丸ハ已に
家へ帰る注
よりの手拍子
数多親よ
若衆と
久水師様
上へ後様と
花して不義
濃姦を家の

△係と色〻
あるお丸ハ
で恋と働く人で
色親よ初を与る
と人情さも怪しと注
異と春と云て滅多
寸も恋ふ迫る充の怪しる
見い痛さを思びて千緑云の
祖ぎもうみと思ひ丸ども脱るハ
そうぼ打てかるうち傷る宮紅葉
苦〻と押分て現出ひとりの曲者を拭込て

△面部をてゆび
人い推ある弱を
徳ふ拂ふて懐刀と
延ハ出るの衣

つゞき

髪結とおもひ早く割る藤蔵小脇に抱へ行んとするに治平へ駆来て縄へ手を振り挽へども又起る彼の曲者へ気を寄ち突当たる中腹に血ゆゑてウンと仰向けに倒るゝと尻目に掛けて曲者へ東の方へ走り行く跡の曲者が直さず逃へ見もまさ

きつかけ気が附きて妙絶せし己も幸ひに思ふ

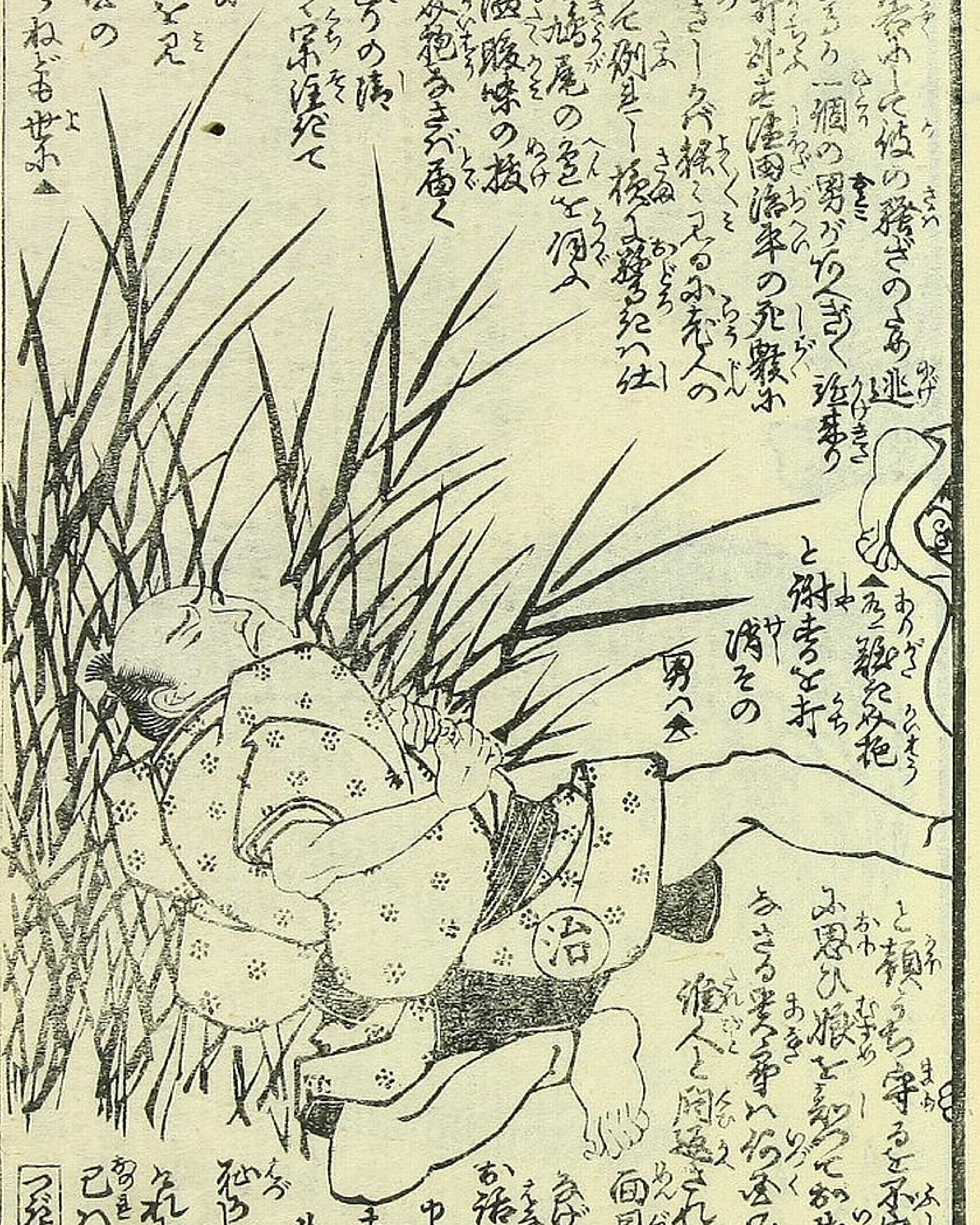
ウシテテシテ老人の生命うまく助かる

姿で居るうくを

やと関へまた治平へ涙を浮めなりし汝弟を物語るに男へ関より驚き怖し僧へあれ身へ彼

お見が父親とおもひ為し

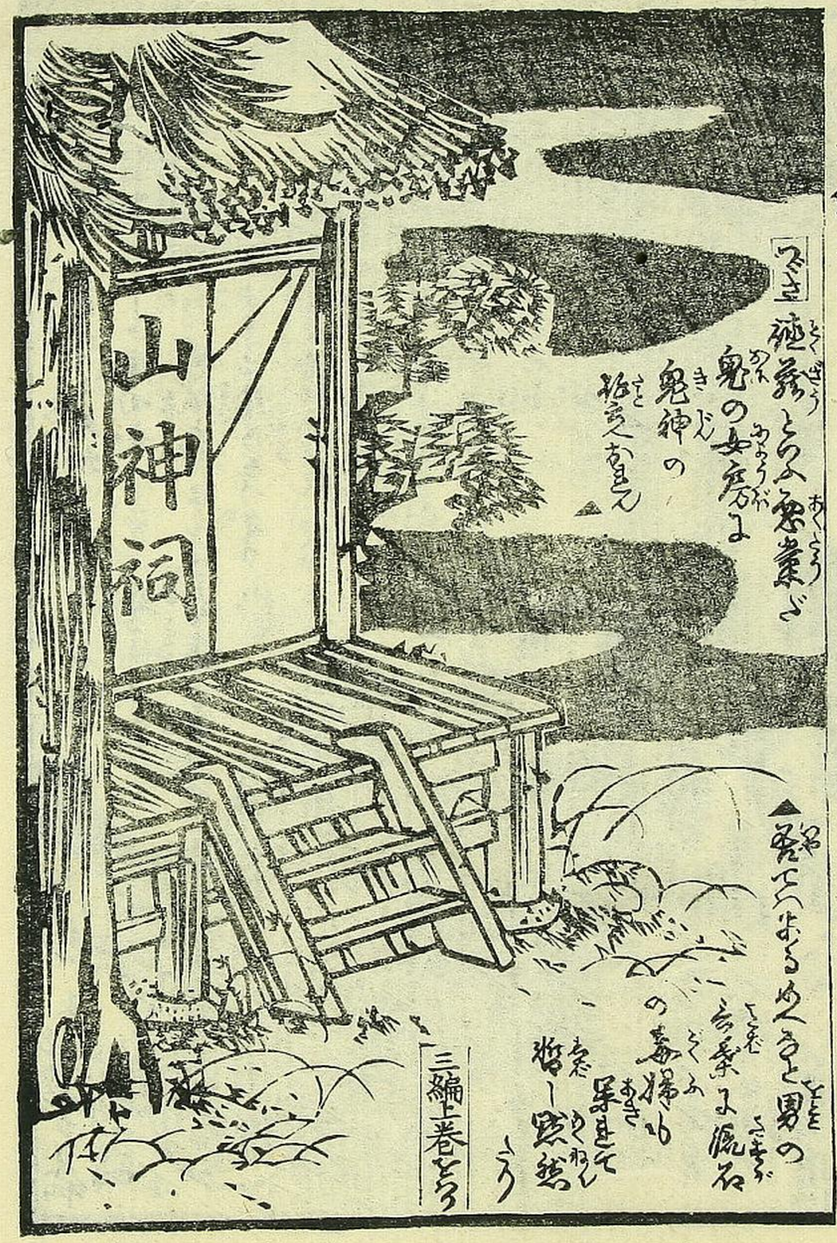
林藪の露中に彼の猪ざの方に逃何者なるか一個の男が行くてさく途倒れ討ちて治平の死骸に驚き驚きしが猿く見るに老人の呼吸止りて倒れし様に驚きに仕ありがたくも藪の蔭の[illegible]を酒へとまで温暖味の拔とやうやく命絶ゆる手届くべしと是方の清水結びて宗注ぎて呼生るに老人へ目を見開き給ふの方を知らねども世に



と頼もし守るを不審に思ひ娘を知りて何此あさる[illegible]此の宿人と間違ひされて両国へお話し申せし

つゞく

つゞき
紙
徳



銅版開化王編 全 鳥酔郷編輯

開化女用文章 全 島田豊三郎編

近世紀聞 初編ヨリ十編迄出板 以下追々発兒 涼崎延房編輯 鮮齋永濯画

夜嵐阿鬼怒花仇夢 五編 大尾 芳川俊雄閲 永島孟斉画 岡本勘造作

義烈回天百首 全 同編輯 同画

金花七變化 三十一編マデ出板 次編追々出板 魯文作 國貞画

高橋阿傳夜叉譚 八編 大尾 假名垣魯文編輯 守川周重画

濡衣女鳴神 十編 大尾 秀賀作 國貞画

出板御届明治十一年 月 日

文 地本錦繪問屋 金松堂 出板人 辻岡文助

浅草花川戸一番地 伊東彦三郎方同居 編輯人 伊東專三

日本橋區横山町三丁目二番地

010190511028

بسم الله الرحمن الرحيم

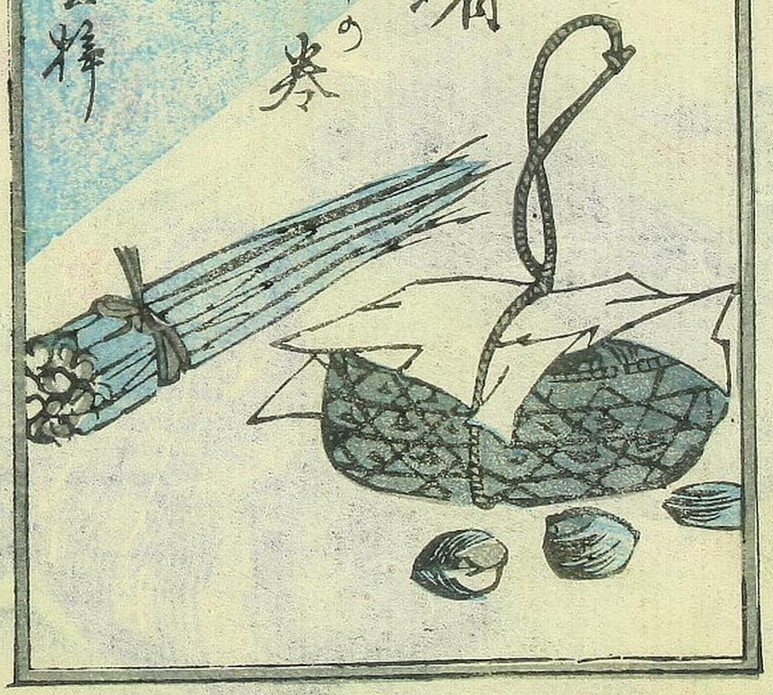
前嶋和橋補綴
水錦隅田曙
第三編

A468
8

水錦 隅田曙

三篇中の巻

仮宅寺之者
梅堂国政画
金松堂梓



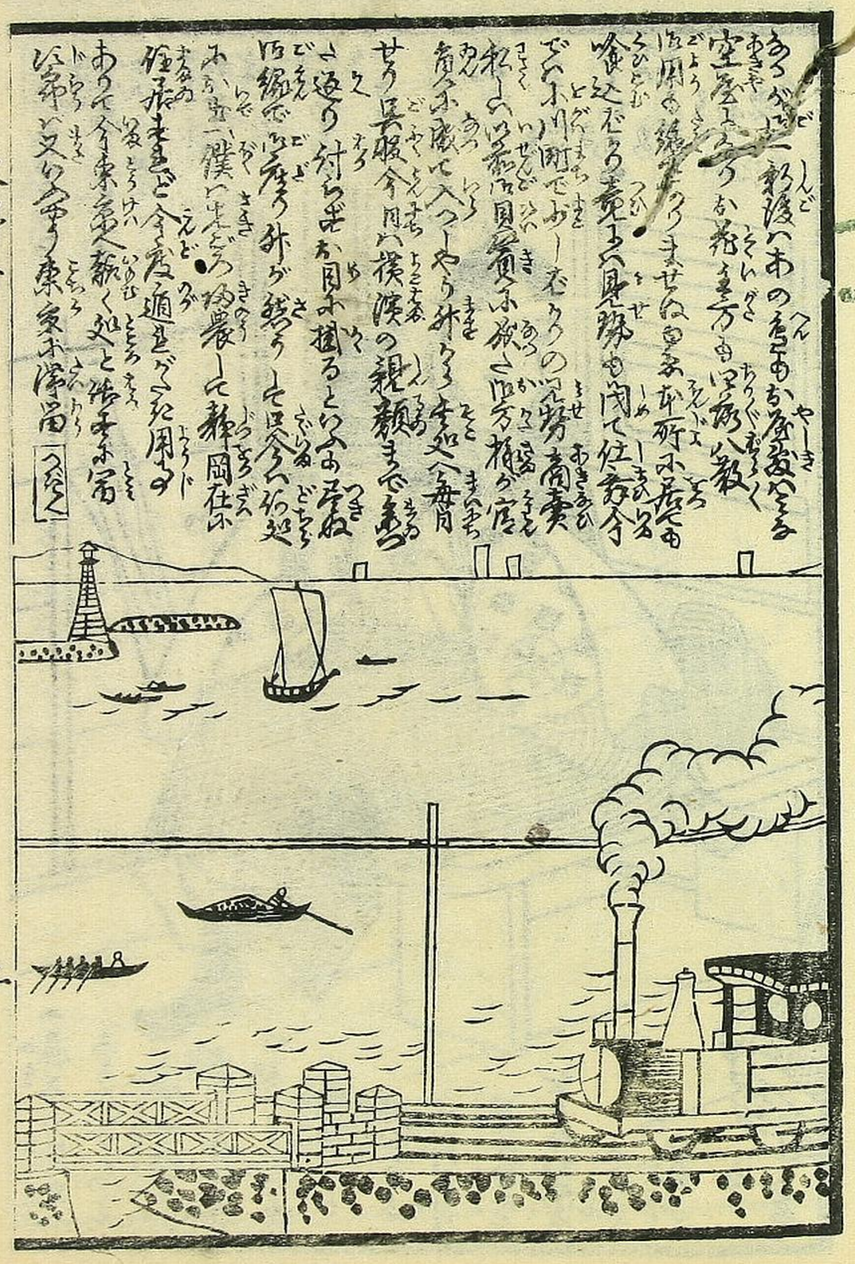
48-8158

▲薩摩人陸奥出生
ちゝく悪事と勤きろ物語り
二つ三つかるゝて水野左將監沒へ
来意出て来つ生ろう稼岡在の
家よ場ろ農事を励こて来扱ろく
二年の月日と送ろくるゝ又種くの
漢毒婦ろ見ん銀のろ人
品へ出て一度ほと扱ろ出ろうんと
女の云景よ強義ゝ己のけどろ
やうはい性奥と行て世を渡ろ
近ろもゝ人ろ見ろと仲ろの
奴等の風俗もろ女ろ二ゝよ夜と五の
先案意人弱ろろと来ろい奴様の強人
治年文治
水野左衛門尉忠邦
一人

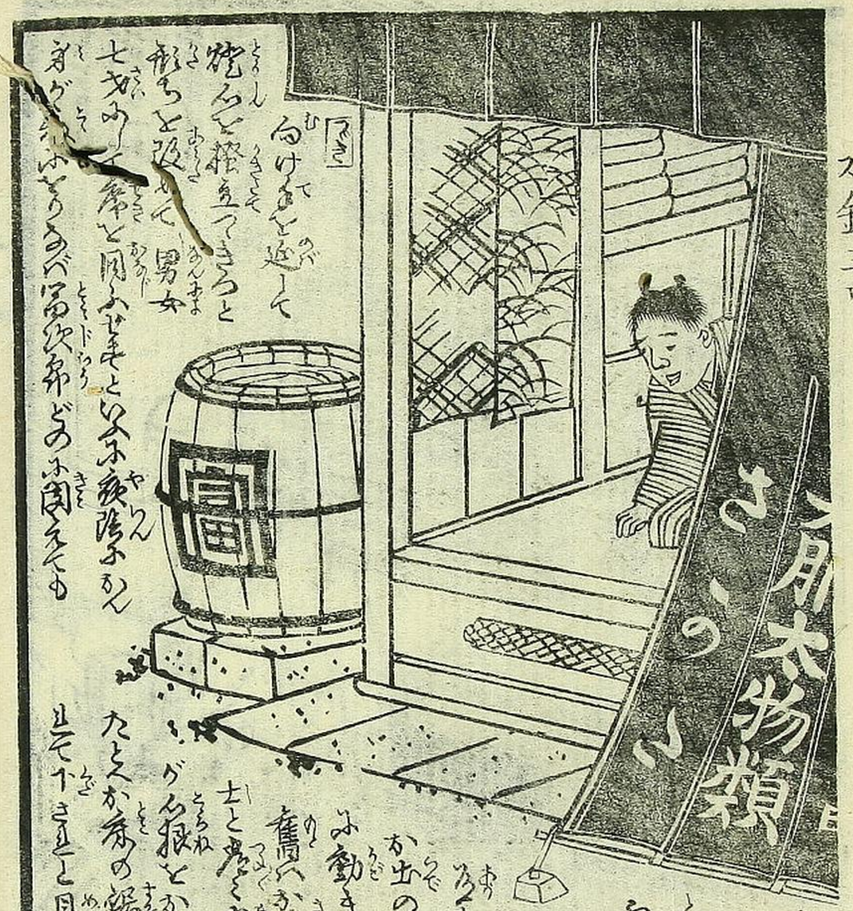
横濱ハ汽車場

汽車ハ新橋ヨリ出方ヲ
さて来る途中芝ハ
高輪ひとりの男ハ深く
岩つくハ腰と座ハモシ
間遠ひまーこそ兎ヲ
新ちまんが芝郎ハ本所ハ
おかめまつさ水戸の殿様でハ
ひとり出みえると関ヲ見て仕方ハ
色ものせを出ハ水戸光ヲ命
あり給うしに和殿ハ何人のりやと問ひ
返さるに男ハ「江戸ヲ出たる江戸
私ーハ会賀の出来町ヲ長崎浦世と
殺しとつさ浦田富次郎とやを者

あるかに一新後ハあの名もお家変ヒ
空変ヒとうか花ヒ方ハ
ひ関の線ヒクヲ主せねハ
喰ヒ込だろう竟ヒ見物ハ関て仕方今
でハ小川町でハーだくの元勢商賣
私ーハ元和貝貧ハ殺ヒ方相ハ宮
角ハ殺て入つーやう外ヒ主人舞月
せう長崎今見ハ横濱の親類まで来
さ返り付ち出ハ撫るとハの産物
江編で産ヒ外ハ殺ヒ主人ハの近
あ一撲ハ出ヒ農ヒ新岡在ハ
強張ヒ出ヒ今度通ヒ江戸ハ用ハ
ありて今来産ヒ新ヒ処と張ヒハ富
江命ヒ又ハ産ヒ来家ハ浮留



水
富
此国へ汽車の内と見給へ



女の分あって大臣ふも
お嬢様人世界多ーい
とさーてに弱りーーゞ
やあつさ和ゝ乳ふ
「角板やさび味さ
者とかさげ
ろまきまうゞ盗る貴者ゞ
お出の若利鉢とさ出宮子
ふ動き溜る我ん貴者も
奮ハお武士様と命ゞ
士と書く関てゞ外出ゞ
ゞ根とか溜ーーゞ
ゞ人とか家の縛ゝ
出て下さまと見元ふ合ゞ

み

水

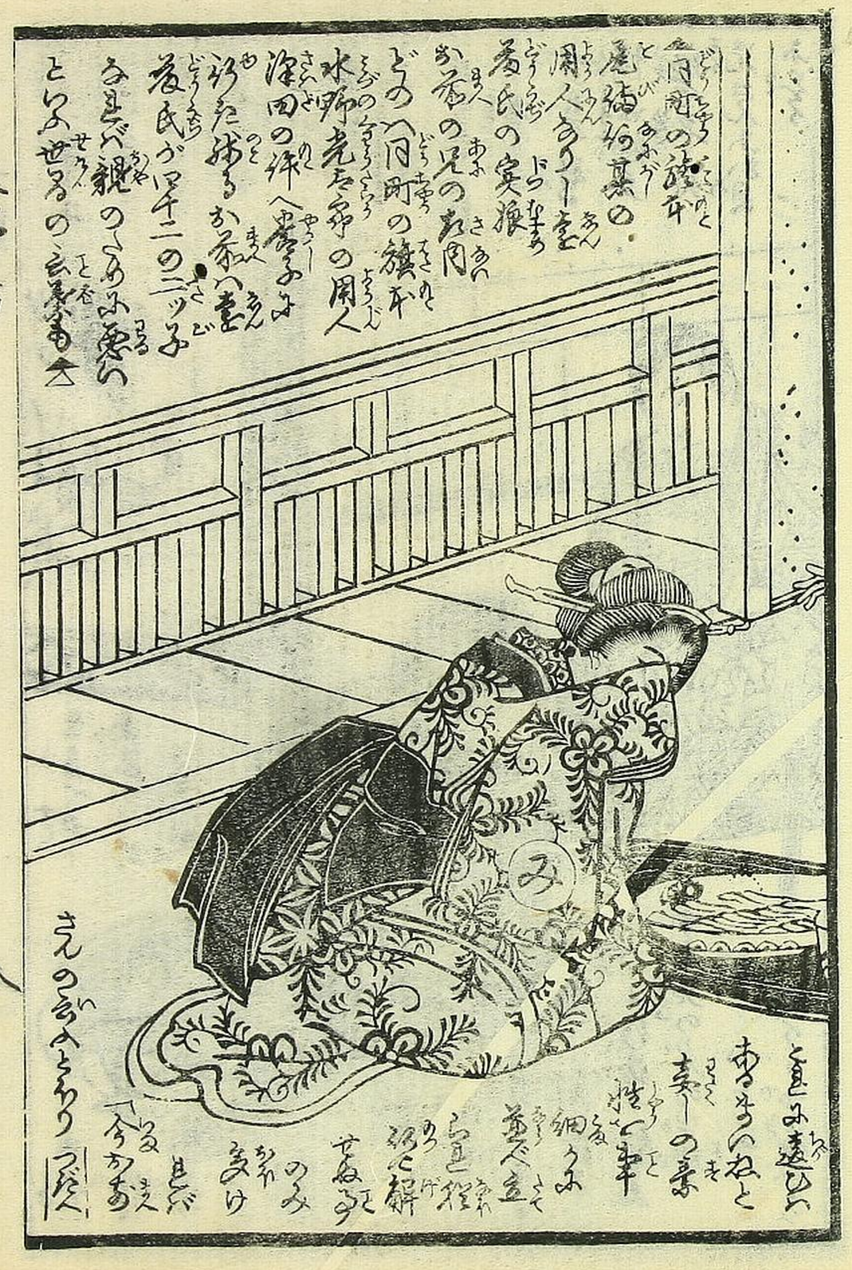
つき
月を見ー
みず
水野

水

つき
▲連で信濃の芝居行
濃りの土間ハ長くへ高人
▲酒
水

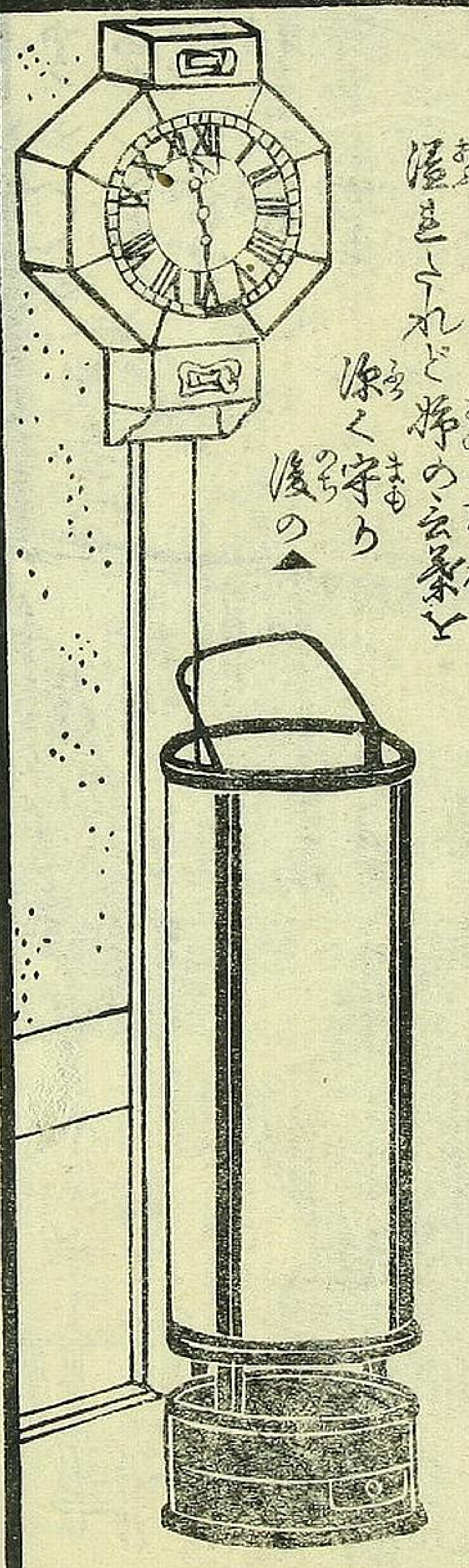
富
み
か

つゞき
此一丁をおろぐ物語と合せ見る事
徳



水野三郎
富
水野と
水野三郎

水



〔つぎ〕敵と云ふん妻しが仇然れども
身寄人に海をわたり風を喰つて逃るもや
せん其も気にかけて帰つても決して親父
さんや母親さんに去らてたまるかね
いづれ尋ねて行うと指示く
吹いて見の横死己れ定をその
水野安楽で亡くべきらこと捨り人狗に
温泉とすれど姉の云条と
深く守り
後の▲

▲会日と約しく別れ只今
までハ云へば何じか今日
来さくらが水野と咲きあひ
縁つくとの将来とひと長く
また物語り小支婦ハ残れ水野ハ
果を暫し云条もあろう哉

三篇中の巻までを

官許 朝鮮 名法 牛肉丸
大包代二十五銭
中包代十二銭五厘
小包代六銭弐厘五毛

官許 たんせきの薬 天泰丸
一包代六銭弐厘五毛

此薬ハ男女とも経水に用ひ新法へ
身一切のさまざまの病にきかざるものなし
考へ此薬を用ひ新法の功能を弁へ
まことにみてらんきをますものなり
あれバ滋補の人として無病壮健なること
むかしより家伝の薬を求めん

此天泰丸ハ第一たんせき○ぜんそく○らうがい○
あせ○さんせん○
きやうふう○せんき○
さんごのせうかち○小児百日ぜきを始
一切のせきに用ひて功能速かなる
妙薬なれバ御試し下され度候

出板御届明治十一年五月八日
地本錦繪問屋 金松堂
浅草花川戸一番地 伊東燕三郎方同居
編輯人 伊東專三
日本橋區横山町三丁目二番地
出板人 辻岡文助

梅堂國政画

A468
9上

水錦隅田曙

伊東専三著

國政画

48-8159

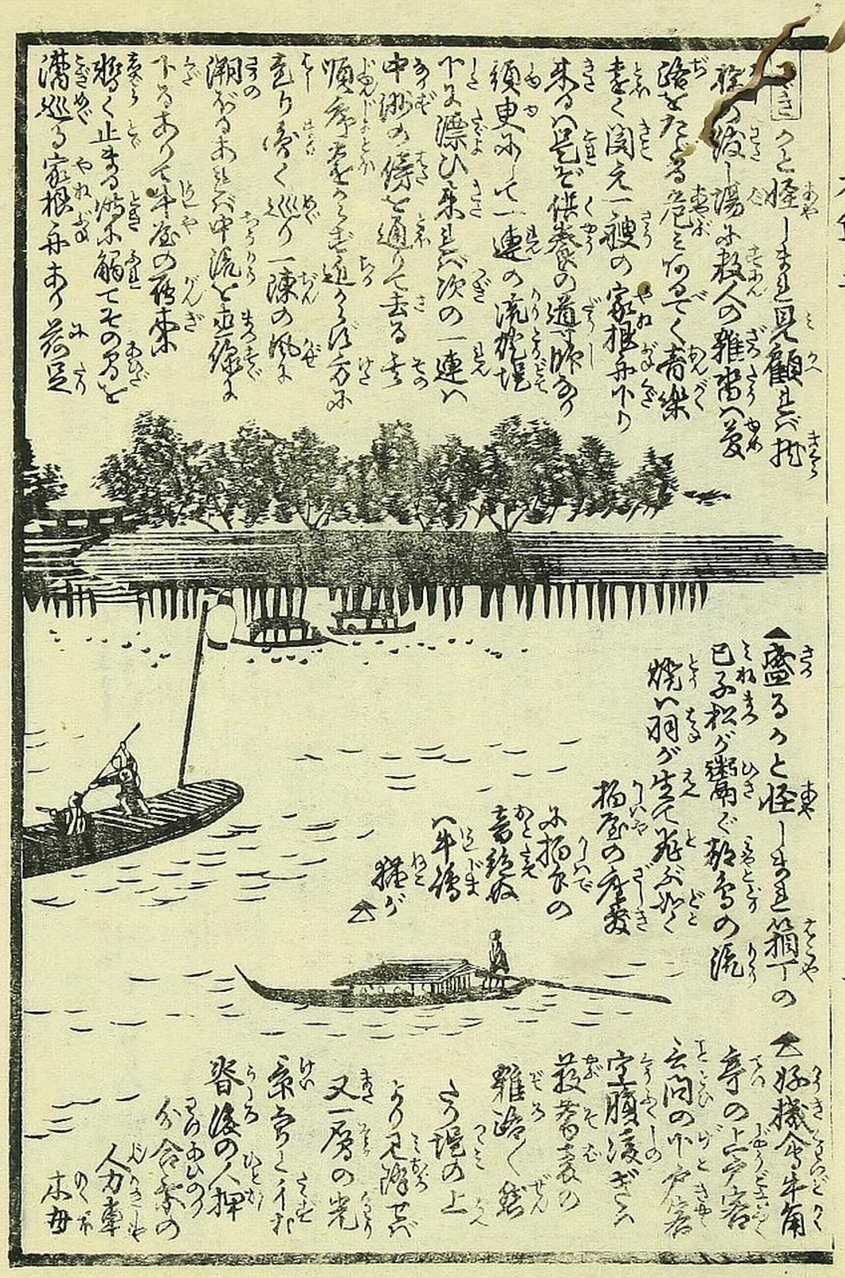
水錦隅田曙第三篇下之巻

記者昨年假名讀新聞編輯局の末机に列るところ寓居は隅田川に接近せる浅草花川戸なるをもて一日退社のゝち同社員を誘引納涼するゝ其頃連夜執行る流燈會を親く見しに同新聞第七百十三號（十一年七月十日）へ其景況を掲しゝ今度此編と草もるに及び本文に因りてこれを吾倚ゝ筆記せし所を拔萃して左に記し本編の餘興とし看客諸君の笑覽に供ス

○隅田川燈籠流廼光景

伊東專三誌

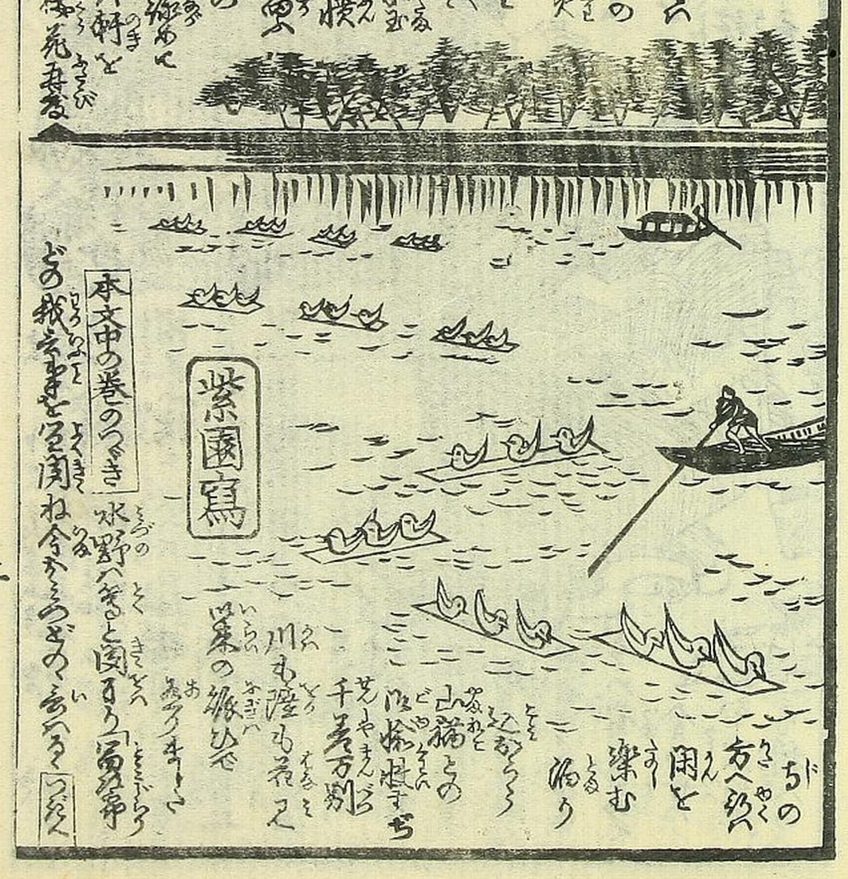
昨夜紅中あり三名ゆて燈籠流し遊覽の大學奥く陸歩の犬の川端山谷堀の墨水は一葉と漕ぐられと稱もなく酒もなく只流燈と目的の舟川中に出るところ（流燈流）多ふあ岸を顧見まへ目の届く所として人うゝぬなく是ハ此燈籠の陸流を沽者見流せへ彼瀬の方い数十の點火赫々として繁紫の沖に有と云ふ彼不知火



▲盛るろと怪一まる箱丁の
已ふ松が鄰南ぐ船子の流
焼い羽が生え花ぶ水
指図の産要
み指図の
書絵図
牛絵
絵が

▲拝撮今牛角
寺の上ヶ者
云河のい伊者
空腹浸ぎ入
薮者表の
雑論く船
さう堀の上
ろう足踏ち
又二房の光
糸京こイれ
沓浪の人押
小合ぶの
人力車
本舟

なる家根の内も清楽と
奏を雅楽ばとばかり書
菓子の供物なる春見の楽ニハ
半絵の兄イ様ら親へ迎ふ
二人あるえ一八百秋の二階賢夫
万能のまくを変ル数匹の猫を
流花舎の俳興ル擁を堂と
する美舞公なる小煙食のむ
ふい揺上の鏡よ壓き見換
結らて成るなるこ圓の東
城張史かの晴く終二独の
素命ルと向者ハ酒揺と縁ゆと
及ぶ鉢と嘆ド尼の掛雪ハ軒を
ルね黄後充若の雑留ハ様荒丑変



紫園寫

本文中の巻のつゞき

水野ハ者と関する「蜀紅帯」
どの我宗ルを宮関ね今かゝるどの云へる

ちの
友人絵ハ
用を
楽む
酒り
猫と
山
拾ふ
千差万別
川も陸も花見
菓の張ひで

「とき」妙くゆへ成程兄の詫
敵とハいふも更く手短
とへ多かねと甚実へ
斯く箇様と
かまえ左内が是
まての行ひと
毒しく語し
「かまえへ斬る毒
婦也又我身の悪事を
覆んとて人に毒実を負
へせつ毒をかさねるゝ
娘子を泥之へ左内の縁を
口実とし…来込で又ゝ結ふを
まさえ身…洋細…世し云ふ紛事へ

▲究竟自害之遂不孝ハ免しても泣
娘の泥除さ親へも恨を不便ハ思ひつく
背共ハ濡毛快ハ云の補晴間へ重ハ…
云り氷野へ側へ揚あく帰女子ハ紅合ね
あんのの志操一端事を過失て云…
身を殺さんと云
兄の左内と雲
泥の違ひあり
鉢りなから死ん
でも云…
どくハ者の…
今の世へ
おも不…て
も科人の

解しかね候ふ…と…の辨解は
初めて…の悪事…
…
…
最前…
被…
是…
たえ…
「気が違つ…
自害すると云顔…
遠つ…
閑…
…迷…
本意…

命を…
…く…
…成…
…ゝ是へ
私…
命を
…の
…
彼…
世の…
の…親へ對して
大不孝…
…
…の言…

徳

富
み

か
徳
と

水
富

徳
之

水
と

徳

三國
富
水

水

つき

明渡つゝる事ゆゑ富次郎夫婦も最へ帰りお豆ゝ嘆ずるみおとゝ（水野の
別る）を告げ小梅の方へ引取と思遣る三人（小川両家と後人）分れ行く
記者曰石巻地浦水野（後列へ帰り）文治年ゆゑ富が数々を物語り
ー小菅ー水野が仁心とお豆ゝが先恨に感ぜー中百合治平へ報恩の義を小菅迎ひ
と悦び其後（農事の稽と即）水野ー富ー小野ー富ー其後
お光は舞を習う年迎名人引載せーとゝひ且お豆ゝの達川氏（夫より猪岡を巡
歴するうち昨年西海の陸路を農紀ろの流燈會を催ふ事と甲列の元関新
出家なーと法會を補け文ある静岡へ住る水野の孫細と浦ー要めて新治平
ゆゑ富ー是より西国へ旅立ー と南青社友時四葉が伊藤の松山へお連ま
舎ーおろう金宿の滝籠より還月氏が織悔物語りと其後書を送り見たると補説ー
て紙上より掲げ今又金巻みしと其為に続くめでたしく
探索人が編輯の水錦義完より次く一萬部の慶高ときて
安年廣く求い法れて隅田川水の錦と惟も看るべしん

↑岩澤蕈

官許 朝鮮名法 牛肉丸
大包代一千五銭
中包代十五銭五厘
小包代六銭三厘五毛

官許 たんせきの薬 天恭丸
一包代六銭三厘五毛

此薬八男女とも老若を問ひ毒を除き
外一切のとものふるの長く病あり
老く打薬ゆゑ内用ひ後ゆゑ外と
きとゆるみてたんきをまもるのちばい
あれば滋養の人とて不病壮健あらし
む要薬本猛毒あり薬メの故い

此天恭丸ゝ義外一たんせんぜん。ぜん
そく。らく毒う。ちゃく法うん
。ひうめん。きゆうふう。さんせん
まんぞのせんぜ。小児百日ぜんそく
一切のせんぜ。内ひそ功効速らあり
要りくん本弦出る記しい

文錦繪問屋 金松堂 出板人 辻岡文助
出板御届明治十二年五月八日
地本 浅草花川戸二番地 伊東專三
編輯人 日本橋区横山町三丁目二番地 伊東東三郎方同居

010190511044